分担研究：　ＨＴＬＶ－Ｉ母子感染の長期追跡および保健指導に関する研究
平成５年度総括研究報告

衞藤　隆*

要約：（１）HTLV-Ｉキャリア妊婦からの出生児における授乳法の選択のあり方について班としての見解をまとめた。主な内容は以下の通り。「妊婦に慎重な配慮の下でキャリアであることを告知し、HTLV-Ｉ母子感染およびその予防について十分説明する。より確実に感染予防をするためには人工栄養や凍結母乳を、なんらかの事情で母乳を選択する場合には短期授乳を勧めるのが望ましいが、後者の場合は根拠となるデータが必ずしも十分とは言えぬので慎重に対処する必要がある。」（２）キャリア妊婦からの出生児における母乳授乳期間とHTLV-Ｉ感染の関連性については、鹿児島県における追跡調査では1歳以上の時点で7ヵ月未満母乳栄養児の感染率は3.4%(2/58)、7ヵ月以上母乳栄養児で25.0%(3/12)、人工栄養児で5.8%(15/259)であり、母乳授乳期間の長短により危険率5%で有意差を認めた。長崎県における1歳6ヵ月以上追跡した調査では、6ヵ月未満母乳栄養児の感染率は8.3%(1/12)、6ヵ月以上母乳栄養児で24.1%(7/29)、人工栄養児で3.0%(15/506)であり、母乳授乳期間による感染率の差を認めなかった。データの蓄積がなお必要である。（３）HTLV-Ｉ母子感染予防保健指導マニュアルのあり方については、班員の分担執筆による原稿を全員で検討し、全10章よりなるHTLV-Ｉ母子感染予防保健指導マニュアルを完成させた。

見出し語：ＨＴＬＶ－Ｉ、母子感染、栄養法、授乳期間、保健指導マニュアル

〔研究組織〕

分担研究者：
衞藤　隆（国立公衆衛生院母子保健学部）

研究協力者：
相良祐輔（高知医科大学産科婦人科）
園田俊郎（鹿児島大学医学部ウイルス学）
武　弘道（鹿児島市立病院小児科）
田島和雄（愛知県がんセンター疫学部）
辻　芳郎（長崎大学医学部小児科）
前濱俊之（琉球大学医学部産科婦人科）
木下研一郎（国立長崎中央病院内科）

班友：
母里啓子（横浜市瀬谷保健所）

〔研究計画〕

以下の３点を研究の目標として分担研究を計画した。(1)ＨＴＬＶ－Ｉ抗体陽性妊婦（以下「キャリア妊婦」）から出生した児における授乳法の選択のあり方を検討する。(2)キャリア妊婦から出生した児における母乳授乳期間とＨＴＬＶ－Ｉ感染の関連を検討する。(3)HTLV-Ｉ母子感染予防保健指導マニュアルのあり方を検討し、完成させる。

平成５年度は、これまでの検討結果を踏まえ、キャリア妊婦からの出生児における授乳法の選択および母乳授乳期間とＨＴＬＶ－Ｉ感染の関連の２点についての議論を深めた上で、キャリア妊婦に対する保健指導のための

国立公衆衛生院母子保健学部
Department of Maternal and Child Health, The Institute of Public Health

手引き書「HTLV-Ⅰ母子感染予防保健指導マニュアル」（以下「マニュアル」）を班員全員で分担執筆した。さらに、この内容を全員で検討し完成させた。

〔研究経過〕

平成5年11月5日、国立公衆衛生院会議室にて第1回研究連絡会議を開催し、分担研究班における本年度の研究の進め方およびマニュアルの草稿を中心に意見交換した。出席者は以下の通りであった。

小島俊行（東京大学）、衛藤　隆、（国立公衆衛生院）、相良祐輔、久保隆彦（高知医科大学）、中村茂行（鹿児島大学）、楠原浩一（鹿児島市立病院）、田島和雄（愛知県がんセンター）、辻　芳郎（長崎大学）、前濱俊之（琉球大学）、木下研一郎（国立長崎中央病院）、母里啓子（横浜市瀬谷保健所）、正林督章（厚生省）。

平成6年1月28日、国立公衆衛生院講義室にて第2回研究連絡会議を実施した。出席者は下記の通りであった。

川名　尚、小島俊行（東京大学）、衛藤　隆（国立公衆衛生院）、相良祐輔、久保隆彦（高知医科大学）、園田俊郎（鹿児島大学）、楠原浩一（鹿児島市立病院）、田島和雄（愛知県がんセンター）、辻　芳郎（長崎大学）、前濱俊之（琉球大学）、木下研一郎（国立長崎中央病院）、母里啓子（横浜市瀬谷保健所）。

マニュアルについての最終的な検討を行った。

〔研究結果〕

(1)キャリア妊婦からの出生児における授乳法の選択のあり方

本分担研究班における平成3年度から継続して行ってきたHTLV-Ⅰキャリア妊婦からの出生児における授乳法の選択のあり方について、本年度はこれまでのフォローアップデータおよび討議結果を総括し班としての見解をまとめ、本研究班で作成した『HTLV-Ⅰ母子感染予防保健指導マニュアル』の中に1章設け「栄養方法の選択について」として掲載した。主な内容は、「妊婦に慎重な配慮の下でキャリアであることを告知し、HTLV-Ⅰ母子感染およびその予防について十分説明する。より確実に感染予防をするためには人工栄養や凍結母乳を、なんらかの事情で母乳を選択する場合には短期授乳を勧めるのが望ましいが、後者の場合は根拠となるデータが必ずしも十分とは言えぬので慎重に対処する必要がある。」というものである。

(2)キャリア妊婦からの出生児における母乳授乳期間とHTLV-Ⅰ感染の関連性

鹿児島県におけるキャリア妊婦からの出生児の前向き追跡調査では1歳以上の時点で7ヵ月未満母乳栄養児の感染率は3.4%(2/58)、7ヵ月以上母乳栄養児で25.0%(3/12)、人工栄養児で5.8%(15/259)であり、母乳授乳期間の長短により危険率5％で有意差を認めた。長崎県における1歳6ヵ月以上追跡した調査では、6ヵ月未満母乳栄養児の感染率は8.3%(1/12)、6ヵ月以上母乳栄養児で24.1%(7/29)、人工栄養児で3.0%(15/506)であり、母乳授乳期間による感染率の差を認めなかった。データの蓄積がなお必要である。

(3)HTLV-Ⅰ母子感染予防保健指導マニュアルのあり方

班員の分担執筆による原稿を全員で検討し、全10章より　なるHTLV-Ⅰ母子感染予防保健指導マニュアルを完成させた。マニュアルの全文は別添資料とする。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:(1)HTLV-I キャリア妊婦からの出生児における授乳法の選択のあり方について班としての見解をまとめた。主な内容は以下の通り。「妊婦に慎重な配慮の下でキャリアであることを告知し、HTLV-I 母子感染およびその予防について十分説明する。より確実に感染予防をするためには人工栄養や凍結母乳を、なんらかの事情で母乳を選択する場合には短期授乳を勧めるのが望ましいが、後者の場合は根拠となるデータが必ずしも十分とは言えぬので慎重に対処する必要がある。」(2)キャリア妊婦からの出生児における母乳授乳期間と HTLV-I 感染の関連性については、鹿児島県における追跡調査では 1 歳以上の時点で 7 ヵ月未満母乳栄養児の感染率は 3.4%(2/58)、7 ヵ月以上母乳栄養児で 25.0%(3/12)、人工栄養児で 5.8%(15/259)であり、母乳授乳期間の長短により危険率 5%で有意差を認めた。長崎県における 1 歳 6 ヵ月以上追跡した調査では、6 ヵ月未満母乳栄養児の感染率は 8.3%(1/12)、6 ヵ月以上母乳栄養児で 24.1%(7/29)、人工栄養児で 3.0%(15/506)であり、母乳授乳期間による感染率の差を認めなかった。データの蓄積がなお必要である。(3)HTLV-I 母子感染予防保健指導マニュアルのあり方については、班員の分担執筆による原稿を全員で検討し、全 10 章よりなる HTLV-1 母子感染予防保健指導マニュアルを完成させた。